

帰国後の雑詠四篇

僕はねぼけまなこで見下ろしてゐる
窓の外の白っぽい光の乱反射
平べつたい屋根のつづく彼方に
森の中にそびえ立つてゐる二つの塔
大きい方が大雁塔 七層の頂上はかすかに
一本の木がつきささるやうに生えてゐる
小さい方が小雁塔 塔が傾いているやうに見える
机の上の腕時計を見ると十一時
待てよ 僕はどこにゐるのだらうか
僕は今日はこれから何をする予定だつたか
今は千年前のあの頃ではない
航空写真でもないかぎり
大雁塔と小雁塔がこんな具合に見えるわけがない
ぼやつとしてゐることは何といふ幸福なことであらうか
次第にいろんなことが明らかになる
塔だと思つてゐたのは森の中の二本の古木であるといふことや
群馬県館林市のビジネスホテルの五階の一室で
僕がおそい目ざめをしてゐるのであるといふことなどが

2

帰国の物品検査を受けるために重いカバンを台の上にやつと持ち上げた
税関氏はカバンには手も触れず僕の顔を見つめながら
「ずいぶんたくさん石をひろつて来ましたね」と言つた
「十三陵の石 洛陽の漢墓の石 龍門の前の河原の石 西安からは煉瓦も持つて来ました」
もしかするとベチューンがその煉瓦によりかかつたかもしれない
どうして石が多いとわかるのだらう
税関氏の炯眼に感服した
「翡翠もあるわよ」
妻は宝石もあると言つて受取書をさし出した
税関氏はそれを自分の鼻先にひらひらさせながら
「結構ですよ」と笑ひながら言つた
「傍朱竹蛇画冊」もカバンの中にあるのだが
楊柳のゆらぐ岸边には茅屋があつて
読書人が河面を眺めてゐる素晴らしい絵などがあるのだが
「どうぞ もう結構ですよ」
これで仕事も一段落 早くお通りなさいといふ態度だつた
翡翠にも画冊にも税関氏は一片の興味も示さなかつた

3

泰明小学校の校庭には西日がさしてゐた
 銀座の方から山口さんが歩いて来る
 四階建の小さいビルがあつて
 終戦後 昭和二十二年頃四階に文寿堂があつた
 中井清太郎さん寺島友之さん石渡恵四郎さんがそこに勤めてゐた
 例のカバンを肩にかけ 人民帽をかぶつてゐる山口さん
 挨拶をしようと思つて近づいて行くと
 山口さんは急に顔をショーウインドの方に向けてしまった
 品物鑑定のするどい目 白い正札 豪華な毛皮が飾られてゐる
 あれ 奥さんもジーン姿で ショールダーバツグを下げて
 北京でのやうに 洛陽の友誼商店のやうに
 西安でのやうに 上海でのやうに
 山口さんの横顔 奥さんは僕の方を向いたのだが
 西日がさしてまぶしさうだつた
 豊かな頬は牡丹の花のひらくが如し
 上気して その目は空間を見つめてゐる
 僕の方を見てゐるのに僕を認識してくれない
 もう互にすれちがつた位置になつた
 僕は思つた ホテルに帰つて逢つたことを言はう
 食堂で隣りあはせになつた時に逢つたことを言はう
 泰明小学校にの側のビルの二階のドイツ風ビヤホールは青豆のスープがいい味なのだ
 そこでは僕の女友達のお嬢さんがチェロをひいてゐる
 月曜日と木曜日が出番ださうだ
 さうだな いつか山口さん御夫妻をさそつて一ぱいやらう
 山口さんに逢つたら さう言はう

4

河が削りとつた黄土の割れ目
 汽車の窓からは茶色の谷がしばらくのあひだ見えてゐる
 緑色がほんの少しある 下方に見える
 人間が崖の途中に腕組みして立つてゐる
 木洩伝の挿絵のやうに細い木の下に立つてゐる
 僕を驚かせた黄土地帯
 洛陽から西へ向けて汽車が走つてゐる
 山岳の割れ目はやがてすぎ去り 赤土の原野がつづく
 小さい太陽が汽木を追ひかけて来る
 長安から文武百官は洛陽に食糧を求めて移勤したといふ
 たくさんの船は黄色い山を縫つて何日かをかけて移動したことであらう

僕はそのことを考へて うつとりとしてゐた
後宮の美女をのせた船はどんな有様だつたらうか
トランジスタラジオは僕の耳の中で言つてゐる

「十三湖のあたり 金木町から西方にあたる日本海側の かつて栄えたそこには 木の
橋がかかつてゐます。

岩畔ディレクターの話によりますと そこはコンクリートの橋になるさうです」

あの曲つた白い木の橋がなくなつてしまふなんて

岩畔さんは中国では料理の写真ばかりとつてゐたつけ

日本海の波と 黄土地帯と 僕の頭の中でごちやごちやになつてしまつた